

還付金詐欺被害防止 入賞作品紹介

還付金詐欺被害防止に関する作品募集について、標語155点、アイデア72点の応募があり、16点が入賞しました。入賞作品は、「電話で『お金』詐欺」被害防止に関する各種啓発活動に活用させていただきます。

標語の部

金賞

知つとるね電話でお金はもらえんと

銀賞

人ごとと思うな身近な詐欺事件

銅賞

それはサギ！ATMで還付金

アイデアの部（一部紹介）

1人暮らしの高齢者世帯を対象に「還付金の電話は切る」のステッカーを電話機にはってもらう

問 八代地区防犯協会連合会

☎0965-3515151



人権啓発コーナー

21世紀は「人権の世紀」といわれ、人々の人権に対する意識や感覚が高まる社会づくりが期待されています。このような社会を目指すために、私たちはどんなことが出来るでしょうか。

身近な生活の中に居場所、出番、役割があり、そして、人との交流やコミュニケーションはどうでしょうか。

住みやすく、お互いの気持ち豊かにつながる関係づくりを進めましょう。

お知らせ

「インターネットによる人権」がテーマの人権啓発動画を上映します。

日時 10月11日(火)13時30分
場所 文化センター

問 生涯学習課

☎0965-5215860



▲金魚すくいならぬ「ブドウすくい」。子どもたちも大はしゃぎです。



▲ハガキ作りでは、折り紙をクラフトパンチで丸型にして、ブドウの実に見えるように貼付けました。



▲氷川町産のブドウを使って、トートバッグの染物体験。バッグに模様をつけるのに苦労しました。



地域おこし協力隊

活動レポート 22



▲Instagram

料理教室～秋料理～

日時 10月22日(土) 午前の部10時、午後の部13時30分（各定員10人）
場所 氷川町公民館 調理室 参加費 500円（当日徴収）
申込期限 10月13日(金)までに電話で申込み
持参物 エプロン、三角巾、マスク、タオル、保冷バッグ、水筒
申込先 地域おこし協力隊 蜂須（農業振興課内） ☎0965-52-5854

町民文芸

投稿先：〒869-4814 氷川町島地642番地
企画財政課宛（毎月5日必着）

短歌

一角をピンクに染めるサルスベリ
百日紅とはよくぞ名づけり
西上宮 村内 一誠

たまきはる命の水の氷川には
太古の森の霊気ありけり
北野津 井田 道寛

ボランティア小学校のミニ畑
児童と植えた茄子もゴーヤも
西野津 古崎 スエノ

秋近し落葉舞来し空き家の蟬
泣く今朝のコーラスに
西野津 古崎 栄子

里帰りする度見せる教え子の
顔は優しき愛に満ちいて
吉本 高橋 澄子

俳句

空覆ふサルスベリの木花開く
西上宮 村内 一誠

火の鳥の畦に孵化する曼珠沙華
北野津 井田 道寛

博多座に案内の電話秋はじめ
西野津 古崎 スエノ

絵手紙の御供ぶどうにひとしく見ゆ
西野津 古崎 栄子

家庭科で田毎の月を習いけり
吉本 高橋 澄子



八火図書館だより

秋は「○○の秋」と言われるように、いろいろな楽しみがある季節です。「読書の秋」もその1つです。

過ごしやすい秋、お気に入り1冊を見つけて秋の夜長を楽しんでみてはいかがでしょう。

新着図書紹介

一般書

晩秋行 大沢在昌
腹を割ったら血が出るだけさ 住野よる
掬えば手には 瀬尾まいこ
こいごころ 畠中恵

児童書

かえるのほんや やぎたみこ
ムシてつ 牛窪良太
すけすけのりもの なかしまじゅんこ
ワニのガルド おーなり由子

「文学散歩」参加者募集

夏目漱石作品「二百十日」に関わる阿蘇方面を訪ねます。

日時 11月16日(水)
参加費 2,500円程度
定員 20人（先着順）
申込 10月18日(火)～11月8日(火)
まで八火図書館と竜北歴史資料館で受け付けます。

おすすめ図書

カレーの時間

寺地はるな

ゴミ屋敷のような家で祖父と暮らすことになった孫息子。一緒にカレーを食べる時間だけは穏やかで打ち解ける祖父が、半世紀の間抱えてきた秘密とは…。読んだらきつと、カレーが恋しくなることでしょう。



問 八火図書館

☎0965-6213489

「雪国」VS「山の音」

法道寺 本田 花風

この一節が題名の「山の音」である。「音がやんだ後で、信吾ははじめて恐怖におそわれた。死期を告知されたのではないかと寒気がした。」戦後の川端文学の代表作と目される「山の音」への言及を欠いては、どのような康成論も成り立たないと言っても過言ではないと言われている。その「山の音」が果たしてひもとけるか。『山本健吉』の解説は、主人公尾形信吾の家の、家族的感情のこまかい網の目が、会話のはしりや、ちょっとした動作の中に、的確に、また陰鬱ふかく、捕らえられているのである。「山の音」は、川端氏の傑作であるばかりでなく、戦後の日本文学の最高峰に位するものである。と評している。各著名人の批評は後にする。

一読しただけでは、小津安二郎が多くの家族物語を撮っているように、淡々と家族の人々を映しとった映画のように家族の日々がつづられていく。そこには老いを自覚し、ふと耳にした「山の音」を死期の告知と恐れながら、息子の嫁に淡い恋情を抱く主人公の様々な夢想や心境、死者の夢を基調に家族間の心理的葛藤を鎌倉の美しい自然や風物と共に描いた作品である。

作品は六年間に渡る複数の雑誌に断続的に十七編の連作で「山の音」から「秋の魚」と書き継がれている。